

# 江戸の大地震

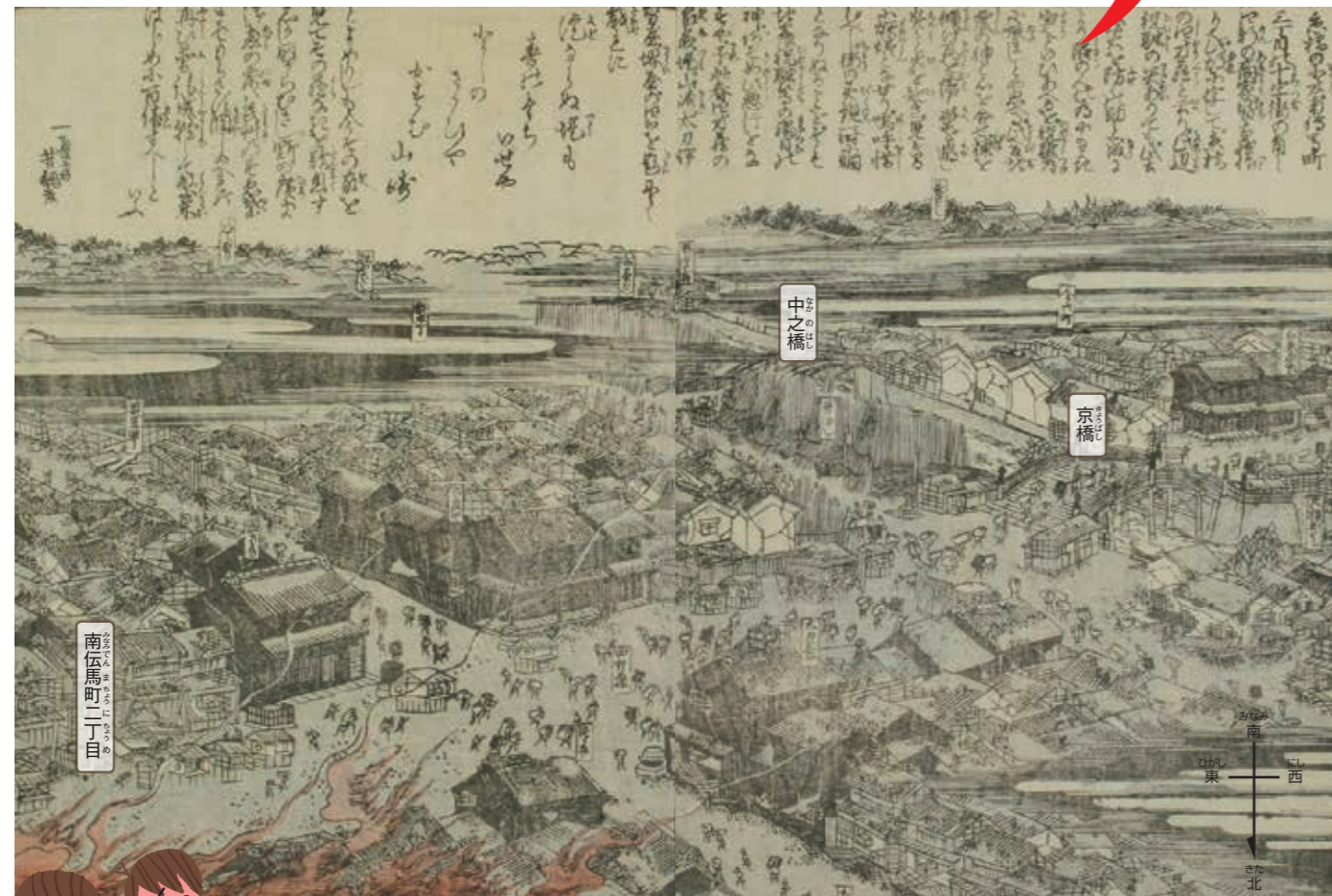
地震国の日本では、江戸時代にも記録に残る大地震があった。近い将来、大きな直下型地震が起こるといわれている、そのころの地震が、対策のヒントになるかもしれないと改めて江戸時代の地震の研究が進んでいる。

## <江戸をおそった直下型地震>

江戸の建物がこわれたり、けが人が出たりした地震は、江戸時代に44回起こったとされる。1703(元禄16)年の「元禄地震」では、両国橋の半分が落ちた。なかでも被害が大きかったのは、1855(安政2)年10月2日、夜の10時ころに起きた「安政の大地震」で、絵にえがかれたほどだった。



現在の京橋付近



この地震では、つぶれた家の下じきになって亡くなった人が、とても多かったんだって。

### 東京をおそった二大地震の比較

項目	安政の大地震	関東大震災(→p.106)
起きた年	1855(安政2)年	1923(大正12)年
震源	千葉県付近?	東京市南方約100キロの相模湾
規模	マグニチュード6.9、震度6	マグニチュード7.9、震度6
中央区の死者(当時の人口)	約300人以上(江戸全体:推定約120万人)	1372人(東京市全体:約226万人)
被害のようす	火事で焼けた面積(江戸全体):2.2km <sup>2</sup>	火事で焼けた面積(東京府全体):38.3km <sup>2</sup>

※「東京地震地図」(新潮社)、「安政大地震と民衆」(三一書房)、「中央区三十年史」上巻(東京都中央区役所)を参考に作成。

安政の大地震のときの京橋付近のようす  
「安政見聞録」は、地域別に地震のようすをくわしく記録した本。京橋から南伝馬町の辺りは、次のように書かれている。  
「京橋の北の南伝馬町三丁目角地に建つ店は、土蔵づくりで火を防ぐといわれていた。しかし、地震で建物がかたむき、かわらが落ち、壁がくずれたために、あっという間に火が燃え広がった。美しかった町が燃え広がったのは、とても残念だ。しかし、この町はまた建物を建てなおして、もっと栄えるだろう。」

## 江戸幕府が行った救済策

幕府は、地震や火事で家を失った人たちに、大きく3つのことを行った。1つは、おにぎりを配る「たき出し」。2つ目は「御救小屋」(避難所)をつくること。3つ目が、「御救米」という米の配給だ。

江戸時代にもこんなしくみがあったのね。



## 災害のようすを伝えた

### 「ナマズ絵」と「かわら版」

1830(文政13)年に京都で起きた大地震のころから、災害後に「ナマズ絵」という印刷物が多く出された。昔の人たちは、地下の大ナマズが暴れるから地震が起きると考えた。早く被害のようすを伝えるために、「かわら版」といわれる、現在の号外のようなものも出された。



地震の原因のナマズは、かば焼きにして食べちゃえ！  
このナマズ絵では、大きなナマズをかば焼きにして食べることで、地震を退治しようとしている。

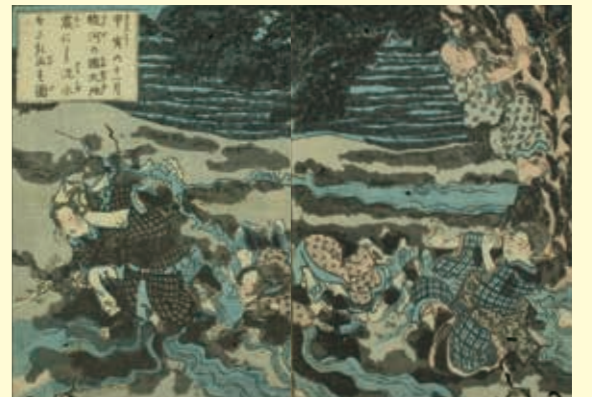


### かわら版売り

かわら版は、火事や地震のニュースをすばやく伝えた印刷物で、「かわら版売り」が道ばたで売った。人々のはかわら版で、被害のようすを知ることができた。

## 江戸時代にも液状化現象は起きていた!!

2011(平成23)年に起きた東日本大震災では、関東地方で液状化現象が起きた。江戸の町は、湿地や海や川を埋め立ててつくられていたので、安政の大地震でも、同じように、液状化現象を伝える記録が残っている。



今も昔も変わらないんだね。



将来に備えて、改めて安政の大地震の研究が進んでいます。

液状化した地面を逃げまどう人々  
「安政見聞録」にえがかれた、現代の深川辺りのようす。この本には、地震のときにはどうすべきか、ということも書かれている。

「御用」の旗やちようちんが、幕府がつくった御救小屋の目印。



幕府が建てた「御救小屋」  
安政の大地震では、江戸に6か所建てられたとされる。町の人からの寄付もあった。



鹿島大明神に要石で押さえつけられるナマズ。

### 「ナマズ様、どうか楽しんでください」

地震によって、たおれた家の新築工事が増えるので、お金がもうかる人たちもいた。この絵は、ナマズにごちそうをする大工職人たちを皮肉っている。



液状化とは、水分が多くふくまれる土でできた地盤が、地震などの振動でどろ水のようなことになること。